



Title	イギリス文学における非ヨーロッパ像：研究の課題と方法
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 183-194
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イギリス文学における非ヨーロッパ像

——研究の課題と方法

正 木 恒 夫

この数年来、イギリス文学が非ヨーロッパ世界をどのように描いてきたかに興味を抱き、それなりに調べもし、考えもしてきた。その一端はすでに2度の講義といくつかの論文¹⁾を通じて発表してもいる。この問題は残念ながら日本ではまだ十分な関心をひくにいたっていないが、イギリス本国では、最近の体制アカデミズム批判の波にのって、少なからぬ（時に激越な）論文や著書が刊行されていることは、日本でも知られている²⁾。1982年にはウルヴァハンプトンで「イギリス文学における黒人 (the black presence in English literature)」と銘打った国際的なシンポジウムが開かれており、そこでの報告をもとに1985年には同名の論集がマンチェスター大学から出た。その波はやがて日本にも及び、1986年の英文学会第58回大会では、東大のイギリス人教師グレアム・ロー (Graham Law) 氏が「コンラッドとバカンにおける『帝国』 (Imperial Themes: Conrad and Buchan)」と題して研究発表を行ない、コンラッドの芸術小説とバカンの冒険小説が、そこに描かれたアフリカのイメージに関する限り、本質的に変りがないことを述べて、そのステロタイプのアフリカ理解を厳しく批判した。当日ロー氏が配布した文献リストを見ても、近年こうした問題に関する研究が、英米では急速に進んでいることがわかる。

私の関心はこのように、日本ではともかく国際的には、けっして奇矯でもなければ単なる思いつきでもない。しかし問題意識や方法の点で、私のやろうとすることと英米学界の研究動向との間には、若干のずれがある。「イギリス文学における黒人」というウルヴァハンプトン会議のテーマを見ても分かるように、英米の研究では、植民地主義批判を前提としながら、人種差別とその克服、

さらには被差別民族の解放といった現実の課題と、意識の上でかかわろうとするものが多い。私はもとよりそれを否定するわけではないが、同時に日本人として独自の問題意識をもち、そこから出発している。それは要約すると次のようになるだろう。

第1は世界認識の問題である。これには二重の意味がある。1つは16世紀以後（つまりコロンブスの「新」世界到達以後）の世界史を、世界のヨーロッパ化の歴史とみる私自身の認識、もう1つはそのような歴史の中で、ヨーロッパ人が形成し定着させてきた世界像である。16世紀以後に起こった世界のヨーロッパ化とは要するに、地球の陸地の4パーセントたらずの面積に住む、世界総人口の10パーセントそこそこの人間が、自らの生活と思考の様式を他の全ての人々に押しつけていったということに他ならない。それは南北両アメリカに始まり、やがてインドからアジア全域、さらには南太平洋、中近東、そしてアフリカ全土へと及んでいくが、問題はこの異様な拡張のエネルギーが、経済的動機と宗教的情熱、資本主義のエトスとキリスト教のバトスとの結合によって生みだされた所にある。その結果世界のヨーロッパ化はまた、世界像のヨーロッパ化をも意味するという、厄介な問題が生じることになった。なぜならキリスト教本来の排他的・戦闘的性格からして、宗教的情熱とは宣教すなわち異教徒改宗への情熱に他ならず、この情熱にとらえられる時人は世界と人間を、単純な二項対立によってしか見ることができなくなるからだ。すなわちキリスト教世界と異教世界、キリスト教徒と異教徒。対立する二項の一方は否定されるべき存在で、いずれは同化吸収されねばならないが、場合によっては抹殺もありうる。このような二項対立的思考からは、異文化をそれ自体の論理と価値観にもとづいて正当に評価する発想など生まれようもなく、その世界認識はきわめて一面的で自己中心的なものにならざるをえない。コロンブスの『航海誌』には既にそのきざしが明瞭にみとれるが、それをさらに豊かな想像力を駆使して物の見事に展開してみせたのが、『ロビンソン・クルーソー』正続2編(1719)であった。18世紀から19世紀にかけてヨーロッパ社会の世俗化に伴い、二項対立の内容そのものも世俗化され、キリスト教は「文明」ないし「進歩」に、ま

た異教は「野蛮」ないし「未開」におきかえられていくが、それはもちろん世界認識の変化を意味するものではなく、むしろ逆に近代科学（例えばダーウィンの進化論）にてこ入れされることで長命を保証されることになった。世界は文明の地ヨーロッパと、未開の闇にとざされたそれ以外の地域とに二分され、その闇に進歩の火を点ずることがヨーロッパ人の責務となる。かつてイギリスがインド統治の実績をまとめた年次報告書に、『精神的・物質的進歩』というタイトルをつけたという事実³⁾ など、この間の事情を雄弁に物語るものである。このような使命感の裏側では当然のことながら、「原住民」は怠惰で幼稚で非理性的だとする紋切り型の異文化像が定着していく。マルクスの「アジア的生産様式」論ですら、この傾向に力を貸さなかったとはいにくい⁴⁾。

このように世界のヨーロッパ化はまた、世界像のヨーロッパ化をも意味することになった。そしてこのヨーロッパ中心的な異文化理解が皮肉なことに、世界のヨーロッパ化に伴って、非ヨーロッパ地域の人々の意識をも支配しはじめる。これらの人々は単に生活と思考の様式だけではなく、自己認識の枠組までも、ヨーロッパから受け取るのである。この傾向はいうまでもなく、ヨーロッパ化のもつとも完全に行われた非ヨーロッパ地域、すなわち日本においても著しい。日本人はヨーロッパの鏡に自分の姿を映す。いやそればかりか、ヨーロッパ人の眼鏡をかけて非ヨーロッパ人を眺める。ここから私にとって、第2の問題が生ずる。すなわち日本人の世界認識にみられる、ヨーロッパ中心的性格である。これはもちろん、何も目新しいことではない。それが明治以来日本人が抱えてきた問題の1つであることは、例えば数年前新聞紙上で戦わされた、新渡戸稲造の「西洋メガネ」をめぐる論争⁵⁾ をみても分かる。また「西洋メガネ」をかけた日本人にとって、例えば「南洋」がどうみえたかについては、『冒険ダン吉』シンдрーム」を摘出した矢野暢氏のすぐれた業績⁶⁾ がある。だが日本人の抱く異文化像の中に、ヨーロッパ的な世界認識がいかに深く浸透しているかを具体的に掘り起こしていく仕事は、まだほとんどなされていないように思われる。その1例として私は注1) にあげた論文の1つで、『ビルマの豎琴』に登場する食人種のイメージが、ヨーロッパ起源のものである可

能性を指摘しておいた。実際あのメルヘン風の奇妙な戦争小説に食人種が現われる唐突さは、ヨーロッパが幾世紀にもわたってその異文化像の中に育んできた食人イメージの影響をぬきにしては、到底説明のつかないものである。もちろん2度の映画化に際しては、食人種の部落はさりげなく僧院におきかえられていたが、私の知る限りそのことを指摘した映画評はなかった。

日本人はヨーロッパの側からみれば、非ヨーロッパ圏に属する異文化人であり、いわば「見られる」存在である。しかし多くの日本人は「見られる」存在であることを忘れ、意識をヨーロッパの側に移動させて、自らを「見る」存在として仮構している。日本人の世界認識にみられるこの矛盾は、今日すでに日本の国際的な立場をきわめて微妙なものにしているが、今後あらゆる異文化との間に望ましい関係を作りだしていくために⁶も、この矛盾は止揚されねばならない。その第1歩として日本人はまず、自己の異文化認識を深く規定するヨーロッパ的な世界像について、正確な知識をもつ必要があるだろう。ではこの課題をイギリス文学にあてはめれば、一体どういうことになるか。16世紀以来イギリス文学が描いてきた異文化像を、編年史風に、あるいは地理的に分類・記述することも、時間と労力をかければあながち不可能ではないが、私はそうした網羅的な方法はとらない。また最近邦訳された『アメリカ人の日本観』（サイマル出版、1986）のように、ベストセラーの分析から、ある国民の他の国民に対する見方の変遷をたどるやり方も、私の問題意識からずれている。私がやろうとするのは、個々の事例の羅列や世論調査風の平板な記述ではなく、およそ5世紀にわたってイギリス文学の中に蓄積されてきた異文化像の、構造的な把握である。その方法をかいつまんでいえば、以下のようになる。

私は先ず分析の対象を、古典として既に評価の確立した作品に限定する。その理由は、そうした作品こそイギリス人の（また翻訳を通して日本人の）意識を深く規定すると思われるからだ⁷が、同時に又、文学的評価の高い作品であればあるほど、そこに含まれた異文化像の歪みを摘出する必要があると考えるからである。従って19世紀後半から20世紀初頭にかけて現れた無数の冒険小説は（その多くが本学図書館の書庫に眠っているものの）さしあたり無視すること

にする。もっとも中にはバカン (John Buchan, 1875-1940) やハガード (H. Rider Haggard, 1856-1925) のように、今でも広く読まれている作家もあるが、彼等もまた古典的な作品の分析に役立つ場合をのぞいてはとりあげない。『さんご礁の島 (The Coral Island)』(1857) で有名なバランタイン (R. M. Ballantyne, 1825-94) もそのような作家の1人だが、彼の作品が分析の対象になるのは、それが『ロビンソン・クルーソー』と『蠅の王 (Lord of the Flies)』(1952) をつなぐ環の役割をはたしているからである。

このように研究対象を作品の質の面から限定したうえで、私の当面の課題は、それらの作品を互いに結びつけるモチーフの網の目を発見することである。モチーフの網の目とはつまるところ、イギリス文学における異文化理解のパラダイムにはかならず、このパラダイムは個々の作品分析のつまかさねからひとりでに浮かび上がってくるものではない。又モチーフの網の目といっても、ただ作品をモチーフに従って分類すればよいというわけではなく、もっとも重要な結節点を発見し、そこからモチーフが放射状に展開していくさまを観察するのでなければ、作品群を構造的に——つまり単に時間や空間の上に配置するのではなく、モチーフを軸にそれらの相互関係において位置づけることはできないはずである。私は目下の所『ロビンソン・クルーソー』こそ、そのような結節点をなす作品だと考えている。

1719年に相次いで出版された正統2編からなる『ロビンソン・クルーソー』は、以後のイギリス文学史において展開される異文化像のモチーフを集中的に含むばかりでなく、逆にそれ以前の作品をも照射して、そこに萌芽的に含まれたモチーフを浮き上がらせる役割をもはたしうるものである。『ロビンソン』が含むモチーフとは、第1に楽園、蛮(食)人、キリスト教およびこれら三者の複合、第2にヨーロッパ的非ヨーロッパ人、第3に指導者としてのヨーロッパ人、そして第4に植民地における支配と被支配およびそれが生み出す人間関係である。以下それぞれについて、簡単に展望を試みる。

1) 楽園・蛮(食)人・キリスト教

洋上の楽園に対する憧憬がヨーロッパ精神史の1要素をなすことは、川崎寿

彦氏の諸作⁷⁾にくわしいが、ロビンソンの島はいうまでもなく洋上の離島ではなく、オリノコ河の河口近く、トリニダード島を望見する無人島である。しかもかならずしも楽園とはいいがたい。しかしロビンソンは「中産の生産者」特有の勤勉と「目的合理的思考」⁸⁾によって、それを楽園に作りかえる。そのようにして築き上げた楽園を脅かすのは蛮人——それも、こともあろうに食人種の影である。だがロビンソンはやがて目前に姿を現わした食人種たちに対し、火器を用いて楽園の防衛に成功するばかりでなく、食人種の1人フライデーの教化にもめざましい成果を収め、彼を模範的なキリスト教徒に仕立てあげる。これが一般に知られた『ロビンソン・クルーソー』、すなわちその前編の構図である。ここには楽園と、それを脅かす蛮人の存在、そして彼等のキリスト教化による危険の除去という、3つのモチーフの理想的な複合関係がある。

この観念複合をもっとも忠実に再生産したのが、バルタインの『さんご礁の島』である。これは18世紀の後半から19世紀にかけて無数に生みだされた『ロビンソン』の亜流の中では、いまだに読者を失わないものの1つだが、この作品では3つのモチーフが全て、『ロビンソン』に較べていっそう強化されている。すなわち3人の少年が流れつく島は、労働による加工を必要としない天然の楽園であり、食人の現場はいっそうむごたらしく、食人種の島々に及んでいくキリスト教の力は絶大である。その意味でこれは、いわば『ロビンソン』の論理的帰結ともいべき作品である。従ってそれが20世紀も後半に入って、ゴールドディング(William Golding, 1911-)の『蠅の王』の中で名ざしで否定された時、それは「ロビンソン伝統」の終えんを意味したといえよう。ゴールドディングの島にはもはや楽園もなければ食人もなく、キリスト教は、いく人かの子供たちの身体をおおうぼろぼろの聖歌隊服の上に、その形骸を留めるにすぎない。そして蛮人は子供たち自身である。衣服をぬぎすて、木の槍を持って狩の踊りを踊る時、彼等は蛮人と化して仲間を殺す。これを野蛮の内面化と解し、あるいは子供の現実のさめた描写として評価するのは自由だが、「蛮人」のイメージ(凶暴・非理性的)そのものには何の変化もないことを見落してはなるまい。

一方逆に『ロビンソン』からおおよそ1世紀さかのぼると、シェイクスピアの『あらし (The Tempest)』(1611)に行きつく。これら2つの、一見何の関係もない作品が結びつくのは、孤島への漂着とその植民地化、そしてヨーロッパ人による現地人の支配という状況の類似によってである。当然のことながら共通のモチーフが現れるが、その扱いは同じではない。『あらし』では、「楽園」にせよ「蛮人」にせよ、シェイクスピア特有のミスティフィケーションによって像が攪乱され、イメージが焦点を結ばないのである。しかも『ロビンソン』とはほぼ同じ地域を扱いながら、「食人」と「キリスト教」のモチーフが完全に欠落している。このようなモチーフの共有と差異の関係は、それぞれの作品における異文化像の質を明らかにする上で、重要な役割をはたすはずである。

さて「楽園・蛮(食)人・キリスト教」という3つのモチーフは、上のように一種の観念複合として現れるだけではない。個別に出現した例として、たとえば「楽園」のモチーフは、後にモーム(W.S. Maugham, 1874-1965)によって、「南海もの」とよばれる一連の短篇小説や長編『月と六ペンス (The Moon and Sixpence)』(1919)の中で精力的に展開される。また「食人」は、例えばコンラッド(Joseph Conrad, 1857-1924)の『闇の奥 (Heart of Darkness)』(1902)の中に屈折した表現を見出すことになる。だがモチーフを個別に展開した例としてもっとも興味をひくのは、『ロビンソン』と同じ新世界を扱ったロレンス(D.H. Lawrence, 1885-1930)の『羽毛のある蛇 (The Plumed Serpent)』(1926)であろう。これはメキシコ革命のロレンス版ともいうべき奇妙な政治小説だが、そのクライマックスは、キリスト教会から聖像を運び出して焼き払い、かわりに土着神の像をすえてこれに生けにえを捧げる場面である。もっともこの血なまぐさいクーデターの裏側では、キリストからケツァルコアトルへの平和的な政権移譲が想定されてはいる。だがそれにしてもこの政治=宗教劇が、かつてアステカ王国の首都テノチティトランで演じられたドラマ——征服者コルテスがピラミッド最上部の神殿を破壊し、そこに巨大な十字架を建てたというあのドラマの、正確な裏返しであることは明らかだ。そしてこの偶像復興を『ロビンソン』のキリスト教モチーフと比較する時、そ

こに浮かび上がってくるのは、この2世紀の間にヨーロッパで生じた価値の転換である。キリストの戦士をもって任ずるロビンソンは、フライデーの改宗に全力をつくすばかりでなく、続編で試みる世界旅行では、中央アジアのダットン人の集落で、偶像に爆薬をしかけてこれを破壊する。一方ヨーロッパ文明に絶望したロレンスが夢見たのは、キリスト教にかわる土着信仰すなわち偶像の復活であった。「ロビンソン伝統」はここでも終りを告げたのである。

2) ヨーロッパの非ヨーロッパ人

ロビンソンの前にひれふした食人種フライデーは、けっして醜い野蛮人ではなかった。すらりとのびた手足、端正な顔立、「ヨーロッパ人と見まがうほどの」愛らしい笑顔。この描写にはどこか、はじめて見るインディオの印象を書きとめたコロンブスの『航海誌』を思わせるものがあるが、重要なのはここに、ヨーロッパ人をプラスの極とし、アフリカ黒人をマイナスの極とする評価軸が確立していることだ。なぜならイギリス文学ではこれ以前にも以後にも、非ヨーロッパ人を肯定的に描こうとする場合、ヨーロッパ化して描くか、少なくともヨーロッパ的価値観に基づいて評価できる存在として形象化するのが通例になっているからである。古い例では『オセロ (Othello)』(1604) が分りやすい。イスラム圏北アフリカ出身の黒人将軍オセロは、今ではキリスト教徒としてトルコのイスラム軍撃破のためキプロス島に派遣されるばかりか、「あれは黒人というより白人だ」と評されるほどヨーロッパ化したアフリカ人である。また同じ時代では、ニジェール河の黒いニンフたちが、そのエキゾチックな美しさにもかかわらず、イギリスの水に身を浸して肌を白くするためアフリカを旅立つという、ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) の『黒のマスク (The Masque of Blackness)』(1605) にも、同じ評価軸の適用をみることができる。時代を下ればブレイク (William Blake, 1757-1827) の「小さな黒い男の子 (The Little Black Boy)」(1789) ですら、作者が奴隷解放運動によせた共感にもかかわらず、この範疇をこえるものではない(「ぼくのからだは黒いけど、ぼくのこころは真白だ」)。だがもちろん文学の質が低くなればなるほど、ヨーロッパの尺度に合せての非ヨーロッパ人の作りかえは、いっそう露

骨に行われる。アフラ・ベン (Aphra Behn, 1640-89) の『オルノーコ (Oroonoko)』(c.1678) はその好例である。西アフリカ出身の主人公オルノーコは、鼻といい唇といい頭髮といい、「色の黒さを別にすれば」ヨーロッパ人そっくりで、その上ヨーロッパ的教養を身につけ英仏語を話すという、徹底的にヨーロッパ化された黒人英雄として描かれる。オルノーコはオセロと合体して意外に長い文学生命を保ち、例えば今世紀初頭のベストセラー『プレスタ・ジョン (Prester John)』(1910) にもその影を落している。作者バカンがここで描くもう1人の黒人英雄ラビュータは、単にヨーロッパ的風貌にめぐまれた例外的な黒人であるばかりか、キリスト教の牧師でもあり、ラテン語を自由に操る教養人でもある。もっともオセロにせよ、オルノーコにせよ、ラビュータにせよ、そのヨーロッパ的な特徴とは裏腹に、激情にかられ理性を失って、いずれも無残な最後をとげることになっている。「ヨーロッパ的非ヨーロッパ人」のモチーフはその陰画としてもう1つのモチーフ、「理性を欠いた野蛮人」をその背後にもつともいえよう。

3) 指導者としての白人

ロビンソンは難破船から運びだしておいた銃を用いて、食人の供宴の中からフライデーを救出する。ここから浮かび上がってくるのは、現地人の紛争に介入してその解決にあたる白人のイメージである。白人にそれができるのは、ヨーロッパ特有の「目的合理的」思考と、卓越した技術水準——具体的には火器によって武装されているからに他ならない。このモチーフを特に好んだのはコンラッドであって、『島のあふれ者 (*An Outcast of the Islands*)』(1896) のウィレム、『ロード・ジム (*Lord Jim*)』(1900) のジム、『闇の奥』のクルツは、いずれもそのような白人指導者である。前二者は東南アジアの多島海を、また『闇の奥』はコンゴ奥地をそれぞれ舞台に選んでいるが、中でも銃声を唯一のことばとしながら、部族対立を利用しつつコンゴ河上流を制覇するクルツの中に、このモチーフの極限をみることができる。同じモチーフはキプリング (Rudyard Kipling, 1865-1936) のインド小説『キム (*Kim*)』(1901) や、フォーサイス (Frederick Forsyth) の『戦争の犬たち (*The Dogs of War*)』(1974) に

よって代表される現代の国際政治小説の中にも、さまざまに変奏されながら出没している。⁹⁾ さらにイギリス文学ではないが、かつて国民的規模で読まれた我国の『冒険ダン吉』や『少年ケニヤ』にも、このモチーフが登場する。ここで白人の役割をはたしているのは、いうまでもなく日本人である。先にもふれた『ビルマの豎琴』における「食人」モチーフの利用とならんで、日本人の異文化認識がいかに深くヨーロッパ的発想に浸されているかを示す、無視できない現象の1つであろう。

4) 植民地における支配と被支配およびそれが生み出す人間関係

ロビンソンは自らの島を「植民地」とよぶ。彼が独力でそこに作りだしたのは、故国イギリスの中産的生産者が誇る小エンクロウジャーのモデルであった。¹⁰⁾ それが真に「植民地」の名にふさわしい相貌を呈しはじめるのは、フライデー父子をはじめとする現地人、さらには数名のヨーロッパ人を受け入れてからのことである。労働力の拡充が開発のテンポを早める。その第1歩がふみだされるのは、フライデーと共に、1人のスペイン人が島の住民となった時である。ロビンソンはフライデーに労働を命じ、スペイン人にそれを監督させるのだが、その時はじめてここには、白人農場主——白人監督——現地人労働者という、植民地経営のモデルができあがる。これは植民地における人間関係を規定する下部構造であって、あらゆる悲劇的な関係がその上に築かれていくのが歴史の必然であったことはいうまでもない。だがロビンソンとフライデーの間に、そのような緊張関係は存在しない。フライデーは嬉々としてロビンソンの命に従い、キリスト教を受け入れる。つまりロビンソンの島は、植民地経営者のユートピアなのである。

だがこのユートピアは前後から不吉な光に照らされている。なぜなら一方には17世紀のシェイクスピアが『あらし』の中で描いた、苛酷な空想の植民地があり、他方にはモームの「南海もの」をはじめ20世紀の植民地小説の中に描かれた、同様に苛酷な現実の植民地があるからだ。シェイクスピアの『あらし』は、その文化的・演劇的・言語的多層性の故に、いまだに解説を拒んでいるものの、そこに多かれ少なかれ北米植民地の現実が投影されていることは、すで

に定説となっている。だとすると、魔術による支配なしには、現地人キャリバンを有効な労働力に転化しえないプロスペロの島は、ロビンソンの植民地とは似てもつかぬ反ユートピアといわねばならない。一方20世紀の作家たちがさまざまな角度から植民地にかかわった時、彼等がそこに見た支配・被支配の現実には、デフォーよりはるかにシェイクスピアに近いものであった。例えばモームの「南海もの」は、その楽園描写の裏側で、植民地支配の方法をめぐるイギリス人同士の対立と破局をくり返し扱っている（「マキントッシュ (Mackintosh)」・「奥地駐在所 (The Outstation)」)。このほか、ベルギーによるコンゴ支配の残酷をあばいたコンラッドの『闇の奥』、支配民族と被支配民族の友情の可能性を問うたフォースター (E. M. Forster, 1879-1970) の『インドへの道 (A Passage to India)』(1924)、現地人の反乱をさめた目で描いたオーウェル (George Orwell, 1903-50) の『ビルマの日々 (Burmese Days)』(1934)、あるいは又現地人労働者との関係を軸に、小農場主夫妻の悲劇を扱ったレッシング (Doris Lessing, 1919-) の『草は歌う (The Grass is Singing)』(1950) など、いずれも植民地における支配・被支配の関係が、一触即発の緊張をはらんだものであることを如実に物語っている。「ロビンソン伝統」はここでもくずれ去った。ユートピアは存在しなかったのである。

以上イギリス文学における非ヨーロッパ像をめぐる、研究の課題と方法を概観してきた。さしあたっては関連作品の網羅とその分析が、必要な作業となろう。その際とりわけ重要なのは、上の問題意識からする作品の読みなおしであって、前記ロー氏の学会発表には、作品の読みにおいて、若干粗さが目についたのは残念であった。テキストの精密な解読なしに、いかなる文学研究もありえないことを忘れてはなるまい。

(注)

- 1) 'The Tempest: a Shakespearean Approach to a Cultural Clash', *Shakespeare Studies* (Japan) Vol. XIV, 1978

「イギリス文学における非ヨーロッパ象(1)」大阪外国語大学学報第64号(1984)
'An Ethnographical Note on *Harp of Burma*', *The Reeds* Vol. 17, 1985

「『闇の奥』の遠近法とアフリカ像」大阪外国語大学学報第72-2号（1986）

- 2) cf. Catherine Belsey, 'The Critical Revolution: English in Britain Now', 『英語青年』第132巻 第3号, 1986
- 3) 吉岡昭彦『インドとイギリス』（岩波書店, 1975）186ページ
- 4) 山崎カヲル「カニバリズムと他者の問題」『思想』1983年5月号
- 5) 朝日新聞夕刊1984年11月27日・12月25日, 1985年2月1日・3月1日
- 6) 矢野暢『日本の南洋史観』（中央公論社, 1979）
- 7) 川崎寿彦『庭のイングランド』（名古屋大学出版会, 1983）
同『楽園と庭』（中央公論社, 1984）
- 8) 大塚久雄『社会科学における人間』（岩波書店, 1977）第1章
- 9) Abena P. A. Busia, 'Manipulating Africa: the buccaneer as "liberator" in contemporary fiction', *The black presence in English literature* (ed, David Dabydeen, Manchester UP, 1985)
- 10) 大塚久雄前掲書